

川口多文化共生シンポジウム “私たちがともにできることは”

～日本人住民と外国人住民の多様性を
活かした元気で住みよい川口のまちづくり～



川口市にはたくさんの外国人が暮らしています。
共に生きる社会を目指すために私たちに求められることはなんでしょう？

令和4年 川口市市民活動助成事業
「多文化共生シンポジウム」に基づき作成

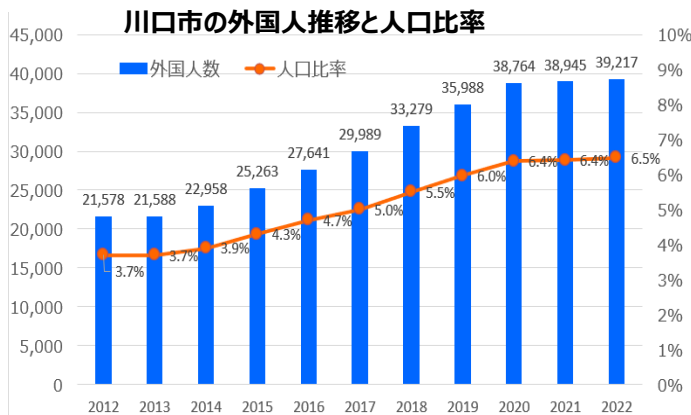
特定非営利活動法人
N G O 多文化共生協働センター・川口
2022年度版

川口市在住の外国人について

川口市にはどのくらいの外国人が暮らしているのでしょうか

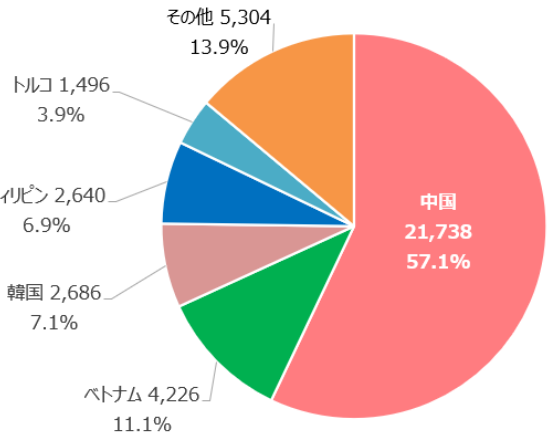
1 川口市における外国人数の推移

単位：人 2022年10月1日現在



2 川口市における国籍別上位5カ国

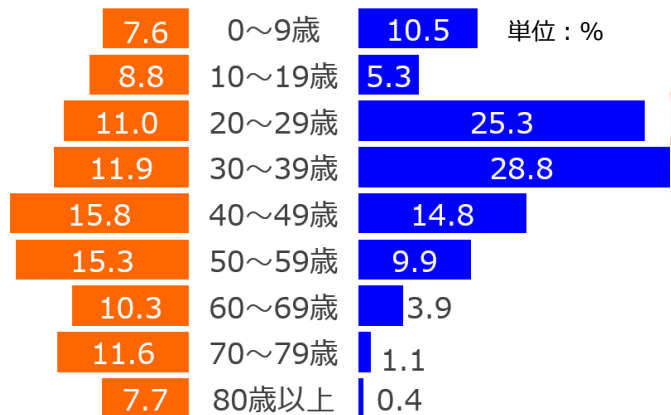
2022年1月1日現在



3 川口市の年齢別統計

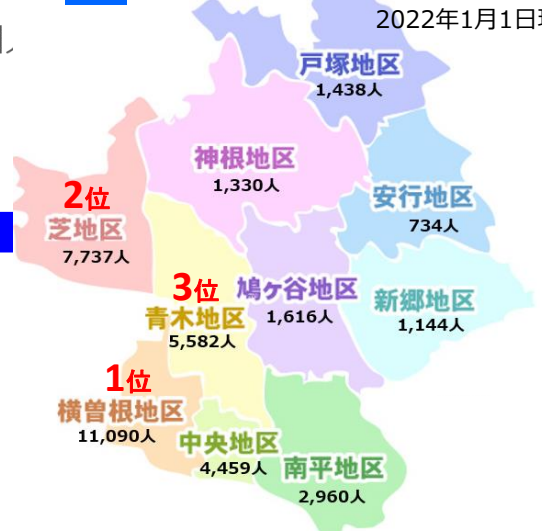
2022年1月1日現在

■日本人 ■外国



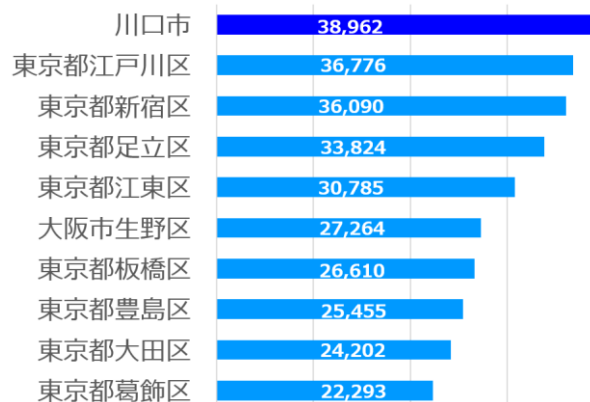
4 川口市の地区別外国人数

2022年1月1日現在



5 在住外国人総数上位10自治体

2021年6月末現在 単位：人



統計でみる川口市の外国人

- 川口市に住む外国人は10年間連続増加
- 外国人の半数以上は中国人。次はベトナム人、韓国人の構成。
- 外国人の年齢構成は若者～子育て世代が多い。日本人は高齢化に移行。
- 地区別には西川口を中心に京浜東北線沿線エリアに集中。(上位3地区で6割強)
- 自治体単位の外国人数では、近年川口市が全国第一位。

引用：法務省統計、川口市協働推進課データ

第3回多文化共生シンポジウム を開催しました。

2022.10.30（日）メディアセブン・プレゼンテーションスタジオ



第3回
川口多文化共生シンポジウム

**私たちが 共に
できることは？**

2022 **10.30(日) 13:00~16:30** (開場 12:30) **参加無料**

★参加対象： 一般市民(中・高生・在住外国人含む) ★募集定員： 会場参加 50名 オンライン参加 100名

★会場： メディアセブン・プレゼンテーションスタジオ (川口市川口1-1-1 キュボ・ラ7F)

《多文化共生のシンポジウム内容》

- ◆開会挨拶 峰久 節子 (NGO多文化共生協働センター・川口 理事長)
- ◆基調講演 : 「日本社会を多文化共生に導けるか？」
～在留外国人に対する基礎調査（令和3年度）からみえるもの～
埼玉大学人文社会科学研究科 中本 進一 教授
- ◆講演 「芝園団地の事例」
芝園団地自治会事務局長 岡崎 広樹 氏
- ◆講演 「日本におけるクルド人」
(株)Rojava 代表取締役 メメット・ユジェル 氏
- ◆パネルディスカッション
 - ・パネラー
 - ・岡崎 広樹 氏
 - ・メメット・ユジェル 氏
 - ・中島 直美 氏 (創 curu 合同会社 代表)
 - ・金子 玲子 氏 (地球市民学習「世界に目を向けよう
～今、私たちにできること～」代表)
 - ・アドバイザー 中本 進一 教授
 - ・ファシリテーター 青木 克浩 (NGO多文化共生協働センター・川口 副理事長)

講師、パネラーのプロフィール（敬称略）

基調講演講師

中本 進一（なかもと しんいち） 埼玉大学 人文社会科学部 教授

北アイオワ州立大学卒業。リーズ大学大学院国際研究修了。一橋大学講師、埼玉大学准教授を経て2008年4月から現職。
埼玉県多文化共生推進委員長、埼玉県留学生交流協議会長等を歴任。専門は異文化間教育。主な論文に「多文化共生政策を視野に入れる留学生受け入れ」（JASSO『留学交流』2015年7月号Vol.52）など。



講師・パネラー

岡崎 広樹（おかざき ひろき） 芝園団地自治会 事務局長

2012年に三井物産（株）を退社し松下政経塾に入塾。2014年より芝園団地在住。学生ボランティア団体「芝園かけはしプロジェクト」と協働しながら、地元内外の人や組織の力を活かした「開かれた自治会構想」を推進してきた。欧州評議会のIntercultural cities Programme（ICC）の調査、第2次川口市多文化共生指針改訂版の策定委員や埼玉県多文化共生推進会議の委員などを務める。2022年7月には、「外国人集住団地—日本人高齢者と外国人の若者の“ゆるやかな共生”」を扶桑社新書から出版。



撮影 浅野 剛

メメット・ユジェル（株） Rojava 代表取締役

1989年生まれ、トルコ南東部出身のクルド人。2006年来日、2013年の（一社）日本クルド文化協会の立ち上げに関わり、以後5年間代表を務める。現在は同協会メンバー。2015年建築関係の会社として（株）Rojava設立し代表取締役に就任。



パネラー

中島 直美（なかじま なおみ） 創curu合同会社 代表

娘が街でクルド人の青年に声をかけられたことから、クルド料理教室「Rojbinkitchen」に参加し「クルド文化教室」を始める。現在は自身の会社の事業として、クルド料理教室、オヤ教室を開催。オヤ製品の販売をおこなっている。著書に「クルドの食卓」。クルドの子どもに限らない外国籍の子どものための「川口こどもの未来アソシエイツ」共同代表。



金子 玲子（かねこれいこ）

地球市民学習「世界に目を向けよう～今、私たちにできること～」代表 元中学校教員 1992年NGO活動の関係でネパールへ。同じ空の下で懸命に生きるストリートチルドレンのことを知り、生徒たちと“学んで伝えるボランティア”を開始。その後学校教育の活動から生涯教育の活動へと繋がり現在に至る。国籍も年齢も社会的立場も超え、地球市民として大切なことを考え、自分達の出来ることから実践するという活動を行っている。



ファシリテーター

青木 克浩（あおき かつひろ） NPO法人NGO多文化共生協働センター・川口 副理事長

1974年からラボ教育センター、その後（財）ラボ国際交流センターに勤務し、青少年の言語教育・国際交流に従事し、米国、カナダ、英国、メキシコ、豪州等を歴訪。国内の総支局長、ラボ日本語教育研修所を歴任。川口市の各種委員に任命。現在は新都心国際日本語学校校長を務める。



基調講演 日本社会を多文化共生に導けるか？

～在留外国人に対する基礎調査（令和3年度）からみえるもの～

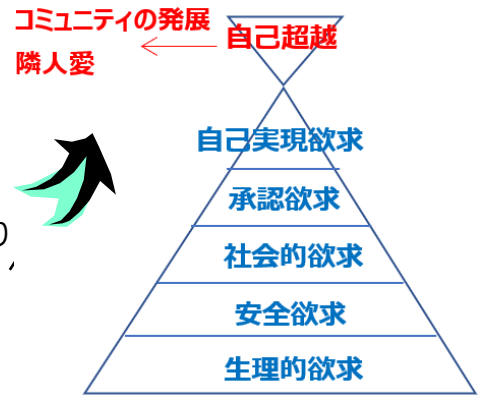
中本 進一 埼玉大学教授

■二分化構造のこわさ

- ・“分ける”と“分かる”は同じ漢字を使う。
分けることで、分かった気になる。
- ・二分化にはかならず“間（あいだ）”がある。
間にも無限性がある。
- ・日本人住民VS外国人住民という二分法的な思考が
問題を悪化させる。
- ・マズローの自己実現5段階の先に、自己超越領域があり
そこは“コミュニティの発展”と“隣人愛”が示されている。
二分法的な思考では、そこまで意識が及びにくくなる。

人生の中で目指す自己実現

マズローの欲求段階説



■外国人・日本人の区別は無意味

↑ 高 自己効力感 ↓ 低	自己解決型 1	自己実現型 4
	適応段階型 (依存型) 2	葛藤型 3
	低	高

← 帰属対象の多様性 →

自己効力感の高低

受け入れられているという実感と自分が職業、家族、社会生活において役に立っているという充実感。

→役に立っているということは孤独ではない。

帰属対象の多様性

私的生活の中のアイデンティティ（例：母であること、など）に加え、公的生活でのアイデンティティ（〇〇会社で△△をしていること、など）帰属対象とは心のよりどころとなるグループのこと。

→帰属対象が多いと集まれる、頼れるグループが多くなる。

→孤独ではなくなる。

日本社会への提言

1. 思考方法を変える：逆転志向

多文化共生政策は「上から下」つまり政府から民間⇒民間から政府へ（ボランティア活動には限界がある⇒高齢化など）

二分法的な思考が問題を悪化させ、特定の文化や民族の単位を特定単位に押し込めている。現代社会は、文化的価値観が多様化されていて、日本人住民の中でも多様化、複雑化、分断化が進んでいる。⇒交流できる場を創出する！

2. 文化（国籍だけではない）を超えた社会的結束力のためのインフラ作り

社会的インフラの質の違いだけで、コミュニティの平均寿命が5～10年異なっている。（アメリカ社会学調査）

3. 誰がリーダーシップをとるのか（コミュニティの再構築）

ドイツフランクフルト市は、新しい局を『外国人局』でも『移民局』でもなく、『多文化局』と命名。「多文化的」を肯定的な意味合いで制度化しようとし、リーダーシップを行政が担う姿勢である。

講演 芝園団地の事例から

～私たちが「共に」できることは～

岡崎 広樹

芝園団地自治会 事務局長

「共に」… 『共存』とは お互いに静かに暮らせる関係
『共生』とは お互いに協力する関係

【芝園団地】



入居開始:1978年
総戸数:2,454戸
住居人数:最大6,500人

日本人は高齢世代
外国人は若者・子育て世代

【芝園地区の人口推移】

	1997年	2022年
日本人	5,309人 (96%)	2,094人 (45%)
外国人	208人 (4%)	2,581人 (55%)

◆日本の将来の縮図

外国人住民の集住による現実（過去の問題点）

- 生活習慣の違いにともなう問題の発生（ゴミ出しや分別のルール、マナーの相違など）
日本人：住環境が変わり不満や怒りを募らせる。
外国人：情報が圧倒的に不足し、生活に不安を募らせる。

この問題を改善するための取り組み

「共存」への取り組み ～日本の生活習慣が伝わる機会の確保～

- 地域で住み始める前に最低限の生活習慣を理解する機会が必要。

地域に住み始める前に、
必要情報が伝わる機
会を確保する

市区町村の転入手続き

雇用企業のオリエンテーション

賃貸物件の入居手続き

●行政のサービス（窓口・ポータルサイト）

●企業へのアナウンス・連携

●不動産会社への働き掛け

「共生」への取り組み ～日本人と外国人の「接点」づくり～

- 「見知らぬ隣人」の間には、意図的な「接点」づくりが必要。

「見知らぬ隣人」の間には
「場」や「情報」に接する
きっかけが大切

直接的「接点」

間接的「接点」

接する
きっかけ

●自治会・地域団体・学校
などを通じた接点

●情報発信（住民情報・
広報誌など）

「共存」から「共生」へのステップ ～隣近所の「場づくり」～

- 出会いたい人が出会える「場づくり」が必要。

まずは「ゆるやかな共
生」の在り方を考える

「共存」だけしたい人

「共生」したい人

様々な
考え方

「共存」

「ゆるやかな共生」

「共生」

「共存」から「共生」へのステップ

講演 日本におけるクルド人

メメット・ユジエル
(株) Rojava 代表取締役

クルド人とは

トルコ・イラク北部・イラン北西部・シリア北東部等、中東の各国に広くまたがる形で分布する。人口は3,500万～4,800万人といわれている。第一次世界大戦の戦勝国により、クルディスタンが国境で分断。各国の政治状況により、人種差別や、経済的に不安定な立場に置かれている。

(ウィキペディアより引用)



日本におけるクルド人

日本には1989年ころに来日し、現在は2,000～2,500人が住んでおり、特に埼玉県蕨市や川口市を中心とした埼玉県南部に集住している。

男性は主に建設土木（解体工事）と飲食関係の仕事に従事している。



川口駅前で開催したクルド民族の新年の祭り「ネウロス」2017年

在日の事情

日本とトルコの間には相互ビザ免除制度が適応されているために、90日の在留資格で入国して、難民申請を行っている。

【参考：在日クルド人の在留資格】

難民申請者の居住資格は“特定活動ビザ”となる。

特定活動ビザを取り上げられると、在留資格がなくなり、入国管理局の施設に収容されるか、“仮放免”という状態で生活することになる。

	就労	住民票	国民健康保険
定住	○	○	○
特定活動ビザ	△	○	○
在留資格なし	×	×	×

特定活動中に留学、定住、配偶者等のビザに切り替えられた人、または、在留資格がなくなった状態から在留特別許可を受け、留学、定住、配偶者等のビザを取得している人もいる。

パネルディスカッション

パネルディスカッションの風景



パネラー紹介 中島 直美 氏
手仕事を通して世界とつながってあなたの世界を広げてみませんか
～支援より協働を目指して～

【スタート】
クルド料理教室の
運営フォローや、
クルド日本語教室
のボランティアなど
から始める。

【現在】
会社を立ち上げ、クルド人と一緒に活
動して様々なイベントなどを展開。
…クルド人の伝統文化、料理や手工
芸などを、イベントや出版を通じて
広く紹介している。

出版



●クルドの女性を支援するのではなく、“協働を目指す”が基本の理念

クルド文化
教室



Harika
手芸ブランドの立上げ



工房の開設



クルド料理講座



活動の主役はすべてクルドの女性

さらに



『川口こどもの未来アソシエ
イツ』も開催

…クルド人に限らず、様々な外国籍のこどもたちに
在留資格、進路、仕事についての情報を提供
するイベントも開催。

パネルディスカッション

パネラー紹介 金子 玲子 氏
地球市民学習：世界に目を向けよう
～今、私たちにできること～



■ 国籍や年齢、社会的立場を超え、共に未来を創る仲間として地球市民学習を柱に活動

- ・小学生から92才の仲間がOne Team（家族的な関わり）
- ・All for One One for All（互いをrespect）
- ・グローバルシチズンとしての“居場所”

〈活動目的〉

- 世界に目を向け、自己と世界との関わりについて考えるきっかけづくり。
- より良い社会づくり、未来づくりのために、今、自分たちの出来ることを考え、実践する。

地球市民学習・実践発表会の風景



【具体的な活動】

- ・定例学習会（テーマを持ち寄り意見交流→視点を広げ、気づきや学びの共有）
- ・イベント（夏休み 春休みなど）
- ・出前授業
- ・被災地との交流（石巻寺子屋 加須ふれあいセンター）
- ・未来の先生展（フォーラム）
- ・JICA埼玉との協働“伝え隊、学び隊、語り隊～共に未来を創る仲間として～ など

☆☆☆パネルディスカッションの内容を要約してご紹介します。☆☆☆

パネリストの感想&参加者からの質問

パネリストの感想

分けると分かるのお話が強く心に残る。確かに普段はレッテルを貼ったり枠に入れて分かった気になってしまうことが多い。その人の思いや悩みなど、心の声を聴くことが大切だと教えられた。

（金子氏）

Understand（理解する）には元に立つという意味。近づいて見なければ本質が分らないとい = 近寄れば見えるということ。だから“分かる”は英語で“I see”という。

相互に理解するためには岡崎さんもお話された“場”と“きっかけ”が大切。

（中本氏）

パネルディスカッション

Q：質問

A：回答

メット氏への質問

ご近所の方々とは挨拶以上に踏み込んだお付き合いをされていますか？もしくはそれを望んでいますか？

自分も含め多くのクルド人は日本人との交流を望んでいます。しかし日本の男性は仕事が中心なので仕事以外ではお付き合いをする機会が少ない。

日本で怖い思いや嫌な思いを受けたことはないですか？（反社会的な人々など）

日本はとても安全で自由な国。トルコでのクルド人に対する政策は、はるかに厳しい。

中島氏と金子氏への質問

多文化共生の実践的な事例を教えてくださいました。活動のなかで「これまで直面された問題点や課題」と「これからどうしたいか」についてお聞きたい。

中島氏：クルドの女性と一緒に働くうえで、クルド人女性の「就労資格」と「女性が働くことに対するクルド人の価値観（女性は家にいるもの・・・）」が大きな2つの壁。

それでもこの“壁”を越えて、支援ではなく“一緒に働くこと”を目指しています。

⇒進学・就職の厳しい制約は、クルドの学生にとっても本当に大きな問題。（青木氏）

金子氏：学校や地域社会において、同じ国籍の子供たちは“1つのカテゴリー”として見られてしまうことが多い。このような画一したレッテル主義を無くして、子供たち一人ひとりの気持ちを理解して、寄り添える意識を広めていきたい。

岡崎氏への質問

先進的な他行政区の取組みを紹介頂いた。やはり公的機関の支援や民生委員・児童委員の活躍などが大切では？

現在は日本人同士でも見知らぬ隣人の時代。ご指摘の通り行政や公的機関が、“交流する場”をつくらないと先に進みにくい社会になっている。例えば『多文化共生モデル地区担当コーディネーター』など、第三者の人材を地域に配置する取り組みが必要。

2014年に芝園団地に住もうと思った理由を伺いたい。

当時、全国の外国人集住団地を調査していて、芝園団地にも何度か訪ねていた。この過程のなかで、実際に団地で生活している側の視点で課題認識をしてみたくなったことが理由。

岡崎さんが注目してきた“外国人集住都市会議”と“ICC”について伺いたい。

①外国人集住都市会議について

日本国内で外国人が多く住む地方自治体とその地域の国際交流協会が参加する組織。静岡県浜松市の呼びかけで、2001年（平成13年）5月に設立された。各都市の課題共有や国などへの提言などを行っている。

②ICC: インターカルチュラル・シティについて

移住者や少数者によってもたらされる文化的多様性を、脅威ではなくむしろ好機ととらえ、都市の活力や、創造、成長の源泉とする新しい都市政策。欧州評議会が欧州委員会とともに進めているプログラムで、現在、その趣旨に賛同する欧州地域内外の約160の都市（自治体）が参加している。2017年にアジア初の都市として浜松市が加盟した。

今後2つとも川口市が加盟するという選択肢もあるのではないかと。

パネルディスカッション

パネリスト皆さんへの質問

お話の中でたくさんのヒントを頂いたが、今回のテーマである“私たちがともにできることは”について、我々参加者が特に大切にすべき言葉を伺いたい。

金子氏：出逢い、つながり、未来へ WE ARE PARTNERS!!

中島氏：皆さんそれぞれ考え方が違う。この“違う”といことを自覚していきたい。

メメット氏：もっとクルドのことを知って欲しい。また日本人とお互いに理解を深めていきたい。

岡崎氏：「共存」や「共生」は、皆さんが住んでいる地域の現状をまず考えて頂きたい。

自分はどうしたいのか？・・・“自分を起点”に考えないと、本当の意味での多文化共生は始まらない。

総括：シンポジウムの振り返り

このシンポジウムは3回にわたり多面的な考察と提言を行いました。

第1回:多文化共生について みんなで考えよう



【多文化共生を阻む3つの壁】





ことばの壁	適切な情報伝達やコミュニケーションを図ることができない
制度の壁	制度を知らないため、生活する上で必要なサービスを知らない、受けていない
こころの壁	国籍や文化、生活習慣の違いから、日本人・外国人双方が積極的な関わりを避ける

文化や習慣が違う住民が一緒になれば摩擦や衝突はあって当然。“**自分も変わる**”という意識が問われている。

第2回:となりの外国人に 訊いてみよう



【外国人パネラーより、様々なご意見を伺いました】

- 日本人との習慣や文化の微妙な違い  中国
- 留学生・技能実習生の生活と直面する問題  ベトナム
- 在留外国人の高齢化と教育について  韓国
- 日本に住むクルドの現状（アイデンティティ・言語）  クルド

第3回:私たちが共にできる ことは？



【自分起点で「共存・共生」の在り方を真剣に考える】

外国人・日本人と二分化した見方はしない。

文化的な価値感が多様化している。
⇒「共存」か「共生」かも、多様な在り方がある。

行政、企業、地域社会の役割や、「共存」「共生」の具体的な取り組み事例を学ぶ。

自分の地域は？さらに自分はどうしたいのか？“**自分起点**”で考えないと真の多文化共生は始まらない。

シンポジウムアンケートより

シンポジウムをご聴講頂いた皆さんのアンケートより、多文化共生に関する様々なご意見を頂きました。

下記にアンケートのコメントを抜粋しました。

- とても貴重な学びの時間でした。多文化共生の現在地と課題を、そして自分の問題として考えるヒントをたくさん頂いたと思います。(60代)
- 参加してよかったです。自分から一歩踏み出すことができない自分があります。クルド女性との協働活動にかかわってみたいと思いました。(70代)
- 様々な角度から「多文化共生」をあらためて考えるきっかけになり非常に勉強になりました。(30代)
- 民間団体だけの力には限界がある。行政が動いてこそ、もっと良くなると思う。(50代)
- 「当事者意識で考えなければならない」というお言葉をお聞きし、今まで気づかないうちに他人事として捉えてしまっていたことに気づくことができました。今、自分はどう思うか、そして何ができるか考え続けていきたいと思います。(40代)
- 市民向けに活動PRを広げてほしい。川口市は確かに外国人も多く、生活のなかでも実感している。市民への知名度をあげるべきと考えました。(70代)

ご来場・オンライン参加ありがとうございました！



今後の活動にもご注目ください。

くわしくは下記ホームページをご覧ください。

《NGO多文化共生協働センター・川口のホームページ》

<https://tabunka51kawaguchi.jimdofree.com/>

特定非営利活動法人
NGO多文化共生協働センター・川口
問合せ：090-4009-9501(中村)
yoshirou-nakamura@outlook.jp

令和4年12月20日 発行